

「ケアの本が出来るまで。」 白石正明 先生

10S2057 松橋

野笛

白石先生の人柄にとっても好印象を受けました。講義の中で、先生は、本を書いて下さる著者に対して「素晴らしい人です。」「尊敬できる人です。」とお話しされていました。お話の最中も、編集者＝サポート役の姿勢は崩されておらず、そんな先生の姿に私は尊敬しています。

<理想と現実>

編集のお仕事は、縁の下の力持ちというイメージです。先生のお話の中で驚いたことは、理想と現実の2つが同時に成立する理論を結論として導き出すという事です。力技・辛いけど面白さがあるというお言葉は、先生の編集経験から自然と出てきた言葉なのでしょう。全く別の部分からのフレーズがイメージ沸きにくい部分があるのですが、編集マンの職業は、広い視野や幅を利かせた観点が必要という事なのではないでしょうか？

<改変モデル→承認モデル>

先生のお話の中で、支援者の基本スタンスについて述べておりました。そのもの自体に改変を加えず、気付くと周囲の関係がいつの間にか変わっている支援者のスタンスについて、お話しされていた時、自分自身を振り返ってみました。病院の空間では、現状否定を内在させた言葉たちにスタッフは意欲を燃やし働いている現実の方が多いい気がしました。本当の意味での支援者とは、相手をありのまま受け入れることなんですね。そこを忘れてはいけません。

<最後に>

私も、信じる・尊重するという意味を生真面目に使わないでみようと。ラフな感覚で、この感性は、素晴らしすぎますよね。